

発行
北海道ポーランド文化協会

〒060-0018
札幌市中央区北18条
西15丁目3-19 安藤方
電話・FAX 011-556-8834
hokkaidopolandca@gmail.com

POLE

第97号 2019.5.1
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会
東京事務所
〒107-0052
東京都港区赤坂
9-6-29-309
音響計画(株) 霜田気付
電話 03-6804-1058
FAX 03-6804-6058



日本・ポーランド
国交樹立100周年
記念事業
(1919~2019)

《第90回例会》朗読と交流の会

入場無料

※予約不要、どなたでも参加できます

第9回 「午後のポエジア」

2019 6/1 (土) 14:00 ~ 17:00



北海道大学クラーク会館3F 大集会室2 (札幌市北区北8西8)



テーマ 私のポーランド

第9回目となる「午後のポエジア」。今回は日本・ポーランド国交樹立100年を記念して、日本人とポーランド人の出演者がポーランドへのさまざまな思いを、詩の朗読、音楽、映像、語りなどを通して自由に表現します。改めてポーランドを見つめ直してみませんか。

第一部 ポーランドの絵本の紹介、古今の詩(ノーベル賞詩人ヴィスワヴァ・シンボルスカ[1923-2012]、ノーベル賞候補詩人ズビグニェフ・ヘルベルト[1924-98]、「蒸気機関車」「アルファベット」などの児童詩が今も愛唱される詩人ユリアン・トゥヴィム[1894-1953]、ポーランド・ロマン派三大詩人の一人ユリウシュ・スウォヴァツキ[1809-49]ほか)やポーランドに思いを寄せる自作詩の朗読など

第二部 楽器の演奏や歌をまじえ、ポーランドの雰囲気を楽しみます。飛び入りも歓迎

交流会 スナックや飲み物で自由に交流をお楽しみください。

共催 ポーランド広報文化センター、後援 (公財)札幌国際プラザ



お問い合わせ 電話 090-2695-3880(小林)
mail: hokkaidopolandca@gmail.com



写真(左・中)ワルシャワ(右)クラクフ

《第90回例会》第9回朗読と交流会「午後のポエジア」～私のポーランド～
北大クラーク会館 3F 大集会室 2、2019年6月1日（土）

「午後のポエジア」に参加して

嵩 文彦

実に楽しく意義深い午後でした。そのなかで特に印象深かったことを書いておきます。

ピアニストの徳田貴子さんが「どこか懐かしいポーランド音楽」というタイトルでお話と演奏をされました。私が一番びっくりしたのは、ショパンが日本人に愛好されるのは、彼の音楽はほかのヨーロッパ音楽と違って、アウフタクト（弱起）がなく、1拍目からいきなり主題にはいるからで、それは日本の民謡とおなじ構造だという説明でした。普段は全く日本の民謡は聴かないのですが、納得させられました。

ショパンはよく「ピアノの詩人」と言われますが、それは「愛や恋を美しく語る叙情詩人」という意味のようです。私がまだ大学生だった頃、喫茶店で友人とショパンの音楽についておしゃべりをしていたら、近くの席の男から軽侮の眼差しを受けました。

戦前の芥川賞受賞作家に多田裕計という俳人・小説家がおりました。彼の著作に『草萌えにショパンの雨滴打ち来る』という俳句・随想・詩・短篇小说からなる本がありますが、この本の題名は前奏曲「雨だれ」の穏やかな前半を思い浮かばせても、後半の激しい暴風雨は「打ち来る」という強い動詞があっても、イメージさせずに終わるのではないのでしょうか。それは「草萌え」という春の季語があまりにも穏やかで暖かだからです。

この日、長屋のり子さんは「Mrs. M の語ったショパン」という題のもとでも良い自作詩を朗読されました。不幸にも離婚して孤独感にさいなまれる夜、ドライブの途中で聴いたショパンによって「生きる意思が冴え冴え燃え」はじめる友人 M の物語です。



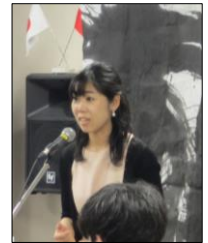
「その時に流れ出した曲がショパンだった。／「革命のエチュード」だった。／アルゲリッチだったか、リパッチイだったか、／いずれにしてもピアニストの指に翼が生えたような／鋭い凄い打鍵だった。／音楽のもつあらゆるアスペクトが有機的に／叩き出されて私に迫った。／あれは一瞬のうちに私が音楽と一体になる／奇跡の瞬間だった。／ショパンが力強い響きを立てて私を歓喜として襲った。」

ショパンには大国に虐げられてきた祖国の歴史の重層があります。結核で早逝しましたが、私たちに励まし続けています。 (だけ・ふみひこ)

どこか懐かしいポーランド音楽

徳田 貴子

日本とポーランドの共通点として、「故郷」に対する思いが似ていると感じます。10年間アメリカで外国人として生活した経験から、ポーランド、日本、アメリカにおける「故郷」の概念の違いを認識するようになりました。



私はアメリカにいた時、個人として自分が他の人とどう違うのか、自分にはどのような理由で他と違った意見があるのかということ強く意識させられました。アメリカでは小さい頃から、他の人と違うところを個性として伸ばします。一人の人間として自分を認識し、自分の夢を実現することがアメリカ社会の成功、幸せなのだと感じました。

一方、日本では論理だけでなく、感情を読み取り、表現することが常に大切にされます。気遣いや細やかな言葉遣い、習慣の中にそれが息づいているように思えます。そこから、自分だけでなく周りの人との気持ちの共感性の中に幸せをより多く見出そうとしているのではないかと感じます。

私はアメリカにいた時、一人ひとりが家族の概念をどうに超越して、一人ひとりを「個」として扱っていることに非常に衝撃を受けました。戻ってくるホームという概念が日本に比べて希薄なのではと感じたのです。私が日本に帰国しようと思った大きな理由の一つは、故郷の、自分が育った環境、歴史、文化の中で生活することで得られる安心感が、代えがたい幸福感につながると確信していたからです。

ショパンはパリにいながら、ナショナリズムの流れの中、ポーランドの踊りのリズムや民謡を引用し、故郷を感じさせる音楽を作曲しつづけました。アメリカにいた時、特にショパンの音楽を聴いて、私の思い出の中の日本が自然と思い出されることが何度もありました。ポーランドの音楽を聴いて、自然と「郷愁」という概念を感じ、暖かく懐かしい、そして幸福な気持ちになりました。日本という国で生まれ育ち、故郷にいて感じる幸福感を知っているからこそ、私は同じ暖かさを持つポーランド音楽に惹かれるのではないかと思います。私が感じた故郷の暖かさを、演奏を通じてさらに多くの方と分かち合いたいと改めて思います。 (とくだ・たかこ)

私とポロネーズ

坂田 朋優

小さなころからショパンの音楽が好きだった私が、ポーランドの先生に初めてレッスンを受けたのは大学4年の終わりでした。大学の客員教授として2年間日本に滞在していたハリーナ・チェルニー＝ステファンスカ先生が任期を終える前に、所属のクラスに関係なく、希望者にはレッスンをしていただけることになったのです。私はすぐに希望を出して数回のレッスンを受けることができ、それ以外もできる限り多くのレッスンを聴講しました。



帰国される前には学生たちとお別れ会が開かれ、最後にみんなで踊ったのがポロネーズでした。長老から踊るという習慣にならって先生方からペアで踊り始められたのが印象的でした。日本人ばかりで、本来の踊りとは少し違ったかもしれませんが、雰囲気に触れることができただけでも貴重な体験

「午後のポエジア」の風景から

であったと思います。

ポロネーズは、ホゾーニ(chodzony)という農民の間で踊られた舞踊に関係していると説明されることも多く、ホゾーニはポーランド語の chodzić(歩く)という言葉に由来しています。ポロネーズというと、ショパンの「軍隊ポロネーズ」のような堂々とした威厳や誇りを示すものとイメージする方も多いと思いますが、感傷的なメロディーで書かれたポロネーズもあります。それを代表するのが、ミハウ・クレオファス・オギンスキの「祖国よ、さらば Pożegnanie Ojczyzny」で、作曲されたのは第二次分割後の1794年でした。華やかなポロネーズと感傷的なポロネーズは一見すると対照的でも、そのどちらにも祖国を思う気持ち、愛国的精神といったものが込められているのに変わりはないと思います。

今回「午後のポエジア」で演奏したのは、アンジェイ・ワイダ監督の映画『パン・タデウシュ物語』で使われていたヴォイチェフ・キラル作曲のポロネーズ(ピアノ編曲版)です。初めてこの映画を見た時から、その旋律が忘れられず、いつか弾いてみたいと思っていた作品でした。(さかた・ともまさ)



①「森へ行きましょう Szła dziewczeczka」②トゥヴィム「おおきなかぶ Rzepka」③同「一、二の、三 Raz, Dwa, Trzy」
(参考 ブログ記事)【WEB 検索】空への軌跡・吟遊記 第90回例会午後のポエジア



ポーランド&ニッポン歳時記 30



実りの年

今年、向かいのアカシアの枝によく二羽の鳩が飛んできます。その梢に届きそうな我が家のベランダで、以前二匹の雛が巣立っていったのを思い出します。自分の人生の果実を見られるのは素敵なことです。

gałąź akacji

アカシアに

znów chyba są u siebie

また二羽鳩の

te dwa grzywacze

里帰り

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

za oknem słońce

レポートの

na biurku usypiają

山と居眠り

prace studentów

陽は外に

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

夏雲や泣く子わめく子稚児の列
薔薇の名はマリーアントワネットかな
さまざまに夏花のはしやぐ雨きたる

岩見沢市、霜田千代麿